

山と博物館

第47巻 第11号 2002年11月25日

市立大町山岳博物館



今年5月に付属園で生まれたシベリアオオヤマネコの子どもたち

(平成14年9月20日撮影)

シベリアオオヤマネコの子ども公開

大町山岳博物館

大町山岳博物館では十一月九日、十日の二日間、今年の五月十三日に当館付属園で生まれたシベリアオオヤマネコの子ども二頭をはじめ一般に公開しました。飼育舎施設や健康管理などの問題から、これまで公開を控えていましたが、二頭が同月十二日に東京動物専門学校（千葉県）へ譲渡されることになったため、移動前に皆さんへの初お披露目と別れを兼ねて公開することになりました。

二頭はオスとメス一頭ずつで、大町山岳博物館が友好提携を結んでいるオーストリア・インスブルック市のアルペン動物園から十一年前に贈られたシベリアオオヤマネコのつがい「アイガー」と「ミッコ」の間に生まれた双子です。誕生直後からしばらくの間は人工ほ乳で育て、はじめ二十cmほどだった体長は五十から六十cmになり、体重も十kg前後になりました。

健康管理に配慮したため、両日とも午後の一時間程度の公開となりましたが、公開初日の九日は雪の舞うあいにくの天候ながら、たくさんの方々が付属園を訪れました。訪れた方々は二頭のすばしっこい動きを目で追いつつ、時折見せる愛らしいしぐさに目を細めていました。

十二日、二頭は東京動物専門学校へ無事に移動されました。学校では学生が飼育実習などの教育普及に二頭を役立てることになっています。まだ名前がない二頭ですので、良い名前を付けてもらって、大事に育ててもらえればと思います。

山岳画家

茨木猪之吉

関 悟 志

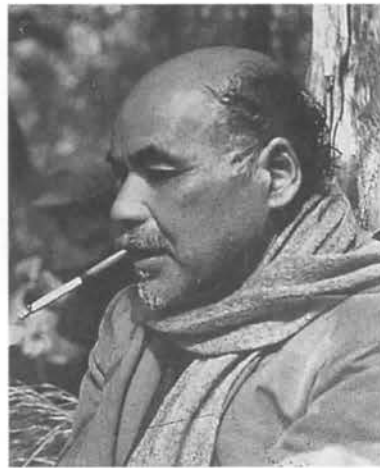


写真1. 茨木猪之吉 (横山駒子氏蔵)

はじめに

平成十四年十月五日から十二月八日まで、池田町立美術館【注1】において「山旅への憧れ 山岳画家 茨木猪之吉展」と題した企画展が同館主催（協力・社団法人日本山岳会・市立大町山岳博物館）で開催されている。この企画展では山岳画家茨木猪之吉【注2・写真1】が残した油彩・水彩・淡彩画やスケッチなど約一五〇点を展示し、これまで知られていなかったその画業を紹介している。茨木猪之吉は明治末から昭和初期に活動した画家である。猪之吉と近代登山発展の時代背景については企画展図録「山旅への憧れ 山岳画家 茨木猪之吉展」（池田町立美術館、二〇〇二）で概要を記したので、ここではより具体的な内容について述べたい。

一、山岳画とは

茨木猪之吉は「山岳画家」と形容されるが、はたして「山岳画」とは一体どのようなもの

いばらきいのきち

なのだろうか。語句から見ると「山岳画」は「山岳風景画」と言い換えることができよう。つまり明治期に海外から日本へ持ち込まれた水彩・油彩といった西洋画の技法によって描いた風景画のなかでも、とくに山を主題として描いたものが山岳風景画で、山を主な画題として描く作家を「山岳画家」と呼んでいる。昭和十一年（一九三六）、猪之吉のほか丸山晩霞や足立源一郎といった画家たち総勢十名が創立会員となり、小島鳥水【注3】と藤木九三を顧問に迎え「好んで山を描く画家の集団」として日本山岳画協会【注4】が立ち上げられた。猪之吉は同会において昭和十二年から四年間ほど事務局を担当していたようである。その創立に際し、昭和十一年三月刊の『日本山岳会会報』第五十五号に中村清太郎が「日本山岳画協会の創立に就いて」という文章を寄せている。この一文は山岳画の特性や可能性について端的かつ分かりやすく述べられているので、一部を抜粋して紹介する。

（ママ）

（前略）山岳画を大體風景畫の一種と見ても、その主題たるあの大地の高揚した天邊の氣高さ、壮大さ、不思議さ、力強さ、その美しさには、又格別のものがあると思ひます。又その邊に、特に日本人に俟（ま）つ仕事があるやうに思はれます。

但こゝにいふ山岳畫とは、其題材を山頂とか山中とか狭く限定する様なものでは決して無く、遠望も山麓も其他溪谷、湖沼、草木、禽獸等の山に屬するものは固より、天象、人生、神話、傳説の類まで、山に關する限りは現實非現實に拘はらず包含されて然るべきものと考へられます。

ここでは、「山岳画」というものを「風景画」の一種と見なしても、主題とする山には特別な存在感があると特徴づけ、それこそ日本人ならではの美意識によつた作画活動があるのではないかと、その可能性を述べている。さらに「山岳画」というものは山のみを描くのではなく、山にある動植物や山麓風景やさらには山に関する神話や伝説などまで有形無形にかかわらず全ての物事を対象に描かれるべきだと定義している。

猪之吉が描いた対象は山そのものばかりではなく、山村風景やそこに暮らす人々の姿もスケッチなどで描いている。「山岳画」を前述のようにとらえるのであれば、猪之吉は紛れもない「山岳画家」であるといえるのではないだろうか。

二、ウエストンのレリーフを取り外す

「日本近代登山の父」とうたわれる英国人宣教師ウオルター・ウエストンの功績を称え、上高地の河童橋近くにあるウエストン園地の岩壁には、その横顔をかたどった銅製レリーフがはめ込まれている。現在、上高地散策のひとつの見所となっているこのレリーフだが、かつて戦時中の一時期、取り外されたことがあった。この一件に、猪之吉は深く関わっている。

なつた。これを危惧した日本山岳会は昭和十七年十一月の臨時役員会でレリーフ取り外しを決定し、同会出席者の中から猪之吉と交野武一【注5】の二名が撤収作業のため上高地へおもむくことになった。翌十二月八日、ふたりは取り外し作業を秘密裏に遂行するため、人目を気にしながら冬の上高地に入る。そしてレリーフは松本の石工二名の手によつて取り外された。取り外したレリーフは猪之吉のザックの中へ丁寧に収められ、一行は逃げるように上高地を後にしたという。その後、レリーフは東京へ持ち帰られ、日本山岳会事務所ではしばらく保管されることとなる。その間、空襲による戦災で一部が焼け溶けるが、後に修復されて昭和二十二年に再び上高地の元の場所に取り付けられた。その後、昭和四十年制作の新しいレリーフに取り替えられて現在にいたっている。当時、この出来事はその性格上、一部が知るのみであった。後年になり、関係者が残した記述や関係者への聞き取りによつて、その詳しい様子が明らかにされた。猪之吉のご遺族の元に保管されていた資料の中に、このとき写した写真があり、これがレリーフ撤収の裏付けとなる資料となった【写真2】。写真の裏には鉛筆で次のような裏書があった。

（ママ）

昭17-12-8 / 神河内 / ウ師露像 / 撤収作業 / 石屋 / 穂刈氏 / 茨木氏

【注6】

ウエストンのレリーフは日本山岳会有志によつて昭和十二年（一九三七）、上高地に掲げられた。しかし戦火が激しくなると地元青年会から、敵国人の像を上高地に置くのはふとどきであるとの申し立てが日本山岳会へ持ち込まれる。さらに戦局の悪化による不安定な時勢も手伝ってか、一部国粹主義の青年らがレリーフを破壊するとの風評も立つように

写真には四名の人物が写っている。雪のついた岩壁に二本のはしごが架けられ、それぞれ先端には一名ずつ人物（裏書によると石屋）が立って何か作業らしきことを行なっている。その下には雪の積もる中、二名の人物

（裏書によると奥が穂刈、手前が猪之吉）がはしごに登ったふたりを見守っている様子である。

裏書の「猪之吉」はもちろん茨木猪之吉であることは間違いない。「石屋」のふたりは松本市寿台で当時石工職を営んでいた二名（金子光雄と助手の原克巳）であることが分かっていて【注7】。そして「穂刈氏」との裏書きが間違いないとすると、写真の人物は穂刈三寿雄【注8】ということになる。

この写真がセルフタイマーで撮影されたのではない限り、カメラのシャッターを切った撮影者一名と写された四名の最低五名がこの現場に居合わせたことになる。つまり写真の裏書通り、人物のひとりが猪之吉でもうひとりが三寿雄だとすると、撮影者は交野武一であり、石工二名のほかに居合わせたのは、猪之吉と交野、そして三寿雄の三名であると推測できる。

しかし、ウェストンのレリーフ撤取については、これまでに関係者の記述や聞き取りなどから詳細な調査と検証がなされており、当時現場に居合わせた人物について関係者それぞれが違ったことを述べており、そこに誰がいたのかはつきりしていない。ことに三寿雄についてはそのときには立会っていないなかつたとされている。このことから、前述の推測を確かめるためには、今後より詳細な調べが必要である。

三、安曇野・上高地周辺への山旅

茨木猪之吉は若いころ、図画教師として小諸に住み、浅間山などに親しんでいた。それ以前には京都で絵を学んでいたこともあり、京都の町を描いたスケッチなども残している。

さらには北海道などに滞在したほか、遠く台湾などへも紀行し、その地の山々に親しんだ。しかし猪之吉の作画の中心は何といっても日本アルプスであった。日本アルプスの山々や山麓の風景などを描くために、長野県内の至る所へ画脚を立てている。なかでも北アルプスへの山行が多かったようで、松本から白馬まで安曇野中心に毎年のように旅をしたことが、残された作品や文章からうかがえる。

安曇野・上高地周辺への山旅では、その土地によって猪之吉には定宿があった。槍・穂高方面では上高地の西糸屋、常念岳や安曇野へは鳥川の齋藤茂宅、後立山方面では大町の對山館、仁科三湖周辺へは築場の和泉屋、白馬方面へは四ツ谷の余旅館（のちの白馬館）というようにである。

ここでは、猪之吉の自著『山旅の素描』（三省堂、一九四〇）から、大町周辺や上高地に

おける猪之吉の軌跡を探ってみよう。「對山館（大町）」

猪之吉が大町にやって来た際に定宿としていたのが明治末から昭和初期まで後立山や立山方面への登山基地として賑わった旅館對山館だった。『山旅の素描』の中には對山館での様子を描いたスケッチ【図1】や二代目館主の百瀬慎太郎との交流について記されている（「岳人の欠伸」「案内者と共に」）。猪之吉は慎太郎と親しく交わり、昭和十七年に上高地でウェストンのレリーフを取り外した帰途にも慎太郎を訪ねて對山館に立ち寄っている。對山館に備えられていた雑記帳（百瀬堯氏蔵）にも次のような猪之吉の書き込みが残る。

（ママ）

白馬嶽山上にて油繪を製／作るつもりそれから未定／大正四年七月二十一日着／茨木猪之吉

このときの山行では對山館で友人（慎太郎



写真2. 上高地ウェストンのレリーフ取り外しの様子（横山駒子氏蔵）

か）から天幕を借りて、四ツ谷（現白馬村）の余旅館で山案内人に丸山岩司を雇って白馬岳に十数日生活したと猪之吉は記している。そして蕨平で露営しているときに志村鳥嶺と出会い作画場所に白馬大池を薦められ、大池のほとりに露営したとのエピソードも自著に記している。

（ママ）

八月八日 芦崎寺平蔵宅泊／八月九日 立山温泉泊（雨天）／八月十日 五色ヶ原野營（雨天）午後晴／途中佐良峠にて今村幸男氏と遇ふ／八月十一日 鬼ヶ岳龍王淨土を越し室堂泊／八月十二日 別山乗越より飯岳に登る下山／して飯澤三窓の岩屋に野營／八月十三日 仙人峠を経て小黒部鑛山小／黒部谷に入る祖母谷温泉泊／八月十四日 南越より大黒銅山泊／八月十五日 四ツ谷に出で大町に着／日本山岳會員 茨木猪之吉及び平蔵

猪之吉は佐伯平蔵を一番印象深い山案内人として挙げています。山行中の食事などでのさりげない気使いが心に残ったらしく、上高地で初めて平蔵に会ったときに作ってもらった「ゴヘイ餅」や先の立山から白馬までの山行中に作ってもらった「暖かい飯とみそ汁」の美味しさを自著で述べています。

このほかにも大町から對山館を基点として針ノ木岳方面へも登っている。百瀬家には猪之吉が慎太郎へ宛てた書簡や、慎太郎へ贈られた猪之吉のスケッチ帳や油彩なども残されている。

「和泉屋（築場）」

猪之吉が大町にやって来た際に對山館とともに定宿としていたのが中綱湖畔築場の和泉屋であった。『山旅の素描』の中にも旅館の様子を描いたスケッチ【図2】や滞在中の作画生活が記されており（「旅の若山牧水」「浅春の山」「冬の三國峠」）、猪之吉の遺稿集『山の画帖』（朋文堂、一九五九）には「私の最

も愛する土地、それは信州はもちろん、北アルプス山麓、青木湖と中綱の間、薬場の和泉屋旅館（「雪によせて」とあり、猪之吉が寄せた愛着の深さが感じられる。



図1. 「対山館」 『山旅の素描』より

「西糸屋（上高地）」
猪之吉は上高地にもよく滞在した。その際は西糸屋が定宿であった。猪之吉は昭和十九年（一九四四）十月二日の朝に奥穂高岳の涸沢小屋を出発し、白出沢を下つてから消息を絶つ。その冬の捜索では見つからずに翌年の夏になってザック片だけが発見されている。この最後の山行の際も上高地では西糸屋に泊まっている【注9】。
猪之吉が消息を絶つ前後の様子は次の通りである。

昭和十九年（一九四四）
九月 十九日 夜、夜行列車にて新宿駅発。
二十日 朝、松本駅着後、徳本峠より上高地入り。
以後、西糸屋に滞在。
二十三日 朝、西糸屋を発つ。
十月 二日 午前七時十分ころ、涸沢小屋を発つ。白出のコレで平林次男に見送られ白出谷を下る。
以後、消息を絶つ。
十二月 四日 白出大滝周辺で、伊藤洋平ら二名が腐食臭を嗅ぎ、周辺を探索。



図2. 「和泉屋にて」 『山旅の素描』より

昭和二十年
八月 某日 白出沢雪溪末端部、滝場にて小山義治が猪之吉のリュックザックの一部を発見。
この遭難は当時猪之吉が抱えていた諸般の事情や戦時中といった社会情勢などから新聞などでは「失踪」と表現され、一時は自殺説までも流れたという。

おわりに
猪之吉が生きた明治・大正・昭和初期というの、ほのほのと山旅と同時期に急速な発展をとげて行く国内の近代登山との重なり合った時代であるといえる。猪之吉の足跡

を通じて、この当時に山をめぐる人々が醸し出していた一種独特の雰囲気を感じ取る事ができるのではないかとと思う。

これまでに猪之吉は画壇において評価されてきたわけではない。登山史的な視点からの検証とともに美術的な視点からの両面からの検証ができれば理想である。今回、猪之吉の没後初となる公立美術館での猪之吉個人を取り上げた企画展が開催された。これを機会にひとりでも多くの方が茨木猪之吉という安曇野周辺や北アルプスゆかりの画家と、その生きた時代の背景について少しでも関心を持つていただければ幸いである。

（大町山岳博物館学芸員）

【注1】池田町立美術館 〒三九九一八六〇（長野県北安曇郡池田町大字会堂七七八）電話〇二六二一六二一六六〇〇
【注2】茨木猪之吉は明治二十一年（一八八八）、静岡県富士山の南麓（現富士市）に生れる。旧姓山本、本名伊之吉。幼時に神奈川県の実業家養子となる。その後、京都や東京で洋画を学ぶ。
水彩・油彩のほかに、スケッチが巧みで、友人たちのユーモラスな似顔絵や山旅の様子などを残す。また、山岳画家としての名をあげてからは、日本山岳会機関誌「山岳」や小島鳥水の著書など山岳関係の図書に多くの挿絵を提供した。著書に『山旅の素描』（三省堂、一九四〇）、「山の画誌」（朋文堂、一九五九）がある。大町山岳博物館では「徳高 涸沢池ノ平」（下巻）油彩・キャンバス、昭和十八年制作）の一点を所蔵している。
【注3】小島鳥水（明治六二（一八七三）～昭和二十三（一九四八）年）は本名を久太といひ、横浜商業高校を卒業後横浜銀行に勤め、そのかわら文筆業を行った。そして横浜でウエズトンと出会い、明治三十八年に日本初の山岳会である日本山岳会（当時は山岳会）を有志らと結成させた。小島氏は明治四十二年の「白峰及び赤石山脈縦横断」登山に猪之吉を誘い、猪之吉は本格的な登山を経験する。自著の挿絵を猪之吉に描いてもらうなど親しく交友を行った。
【注4】日本山岳協会は、現在十数名の会員が山をモチーフに精力的な作画活動を展開している。
【注5】交野武（明治四十一（一九〇八）～昭和六十一（一九八六）年）は愛知県出身で明治大学卒業後、昭和三十五年に明大アラスカ学術調査団のマップキリー登山隊長、昭和五十六年には明大エベレスト登山隊長を歴任。会社を退職後は長野県上伊那郡長谷村浦の山中に独居した。
【注6】「神河内」とは「上高地」のことである。上高地の呼び名には様々な漢字があげられているが、もともと地元では「カミグチ」などと呼ばれていたという。「ウ師」とはウエ

ストンの頭文字の「ウ」に先生といった尊敬の意味を込めた「師」をつけたもので、ウォルター・ウエズトンに指す。「番像」とはその人が存命中に造っておく像のことである。
【注7】金子光雄の先代である石工の金子栄蔵はレリーフ取り付け時に雇われている。これらについては「日本山岳会信濃支部三十五年」（日本山岳会信濃支部、一九八四）に詳しく述べられている。
【注8】徳高三寿雄（明治二十四（一八九九）～昭和四十一（一九六六）年）は長野県松本市出身の北アルプス南部における初期の山小屋経営者。また、山の風景をカメラに収め続けた山岳写真家のほか挿絵研究家としても知られる。
【注9】西糸屋と茨木猪之吉の関係については奥原教水氏が「残された三人の〈字〉」と題して「山と博物館」第四十五号第六号（大町山岳博物館、二〇〇〇）で詳しく述べている。
【参考文献】
『世界山岳百科事典』（山と溪谷社、一九七二）
『別冊太陽』NO.103 Autumn Tokyo（平凡社、一九九八）
『日本山岳協会の創立60周年記念誌』（日本山岳協会、一九九七）
北澤勝治著「茨木猪之吉」「大町市史」第五巻「民俗・観光編」第七章第一節四項五―二（大町市、一九八四）
『日本の山岳風景画―誕生と展開』（長野県信濃美術館、二〇〇〇）
春日俊吉著「山岳遭難記」（朋文堂、一九五九）
交野武一著「茨木猪之吉画伯の遭難」「ケルンに生きる 遭難の手記」二（二文社、一九六六）
交野武一著「茨木さんを憶ふ」「山岳」第四十三号第一号（日本山岳会、一九四八）
石原きくよ著「山を想えば人恋し」（郷土出版社、一九九三）
百瀬慎太郎著「山を想へば」（百瀬慎太郎遺稿集刊行会、一九六二）
『日本山岳名著全集十一』（あかね書房、一九六三）

訂正とお詫び

第四十七巻第十号二頁一段目十三行の（一六一九）は（一九一六）の誤りでした。訂正するとともにお詫びいたします。

山と博物館 第47巻第11号
発行 千 長野県大町市大字大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL 〇二六二一六二一〇二二一
FAX 〇二六二一六二一〇二二三
印刷 大糸タイムス ㈱
定価 年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号 〇〇五〇四〇一七二二三九三